

# 福岡工業大学 機関リポジトリ

## FITREPO

Title	<若さ>を回顧する「私」——夏目漱石『心』論——
Author(s)	徳永 光展
Citation	福岡工業大学研究論集 第39巻2号 P267-P280
Issue Date	2006
URI	<a href="http://hdl.handle.net/11478/426">http://hdl.handle.net/11478/426</a>
Right	
Type	Research Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

## 〈若さ〉を回顧する「私」

—— 夏目漱石『心』論 ——

徳 永 光 展 (社会環境学科)

**The narrator recalls his “youth”**—— A Critique of *Kokoro*, a Novel Written by Sôseki Natsume ——

Mitsuhiro TOKUNAGA (Department of Social and Environmental Studies)

**Abstract**

In Sôseki Natsume's *Kokoro*, the narrator who writes the first and second of three parts of this novel makes frequent references to his youth, a time of his life when he was connected to Sensei. However, in focusing on this term, the reader must come to recognize that the narrator had already lost his “youth” and had become a sufficiently mature adult by the time he had written this novel. While *Kokoro* was written in 1914, approximately two years after Sensei wrote his last testament (1912), it is never revealed in the novel when the narrator wrote the first and second parts. Accordingly, an issue arises in that the reader is not sure whether he or she should regard the narrator as having still been young at the time of writing this novel or as having been in the process of recalling a distant past long after the death of Sensei at a time when the narrator was no longer young. This critique focuses on the narrator's youth, such that interpretations of the novel are shown to vary depending on where the frame of reference is placed. It is also concluded that, if the narrator is thought to have already lost his youth at the time that he was writing his private papers, parallels could be drawn between this act and the inclusion in Sensei's testament of his reminiscent attitude towards his school days.

Key words: Sôseki Natsume, *Kokoro*, the narrator, youth

**1 問題の所在**

夏目漱石『心』において、〈上〉〈中〉を執筆する「私」は先生と関わりを持った当時の〈若さ〉に度々言及しているが、その表現にこだわるならば、執筆する時にはもはや〈若さ〉を失っており、十分に成熟を遂げた成人になっていると見なさねばならなくなる。先生による遺書執筆（明治45年）から約2年後の大正3年に

『心』は執筆されているものの、「私」は〈上〉〈中〉をいつ執筆したのかということについては作品中で一切明かしていない。従って、作品を執筆した時の「私」はまだ若いのか、それともはや若くない程の時間が先生の死後に経過し、「私」は遠い過去を回想していると思えるべきなのかという問題が生じてくる。また、手記執筆時の「私」が〈若さ〉を喪失していると思えば、そこには遺書の中で先生が学生時代を回顧していた姿勢にも似た様子が指摘できるのである。そこで、本稿では、「私」の〈若さ〉に焦点をあて、視点の置き方次第で解釈が変容する様子を示してみたい。

## 2 青年の〈若さ〉

「私」は、「上 先生と私」,「中 両親と私」で、先生との交際を中心に学生時代を回顧している。そこには、「私」が筆を執っている語りの時間（現在）と、語られる内容——物語——の中の時間（過去）の二つ<sup>1)</sup>が存在するが、「私」が物語を執筆する時間に立って当時を振り返り、意味付けたり、解説したりするかのような筆致を取る様子は至る所に観察できる。例えば、「私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて来た」（上4）という記述からは「解らなかつた」当時とは異なる「心持」を抱く「私」の様子がうかがえる。また、「若い私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた」（上7）との述懐は、当時を突き放した回想の視点に立ったものだから、「益繁く先生の玄関へ足を運んだ」（上6）様子にしても、それが周囲から誤解を招きかねない程だった事実を「私」は認めており、当時の態度を批判的に振り返る洞察力をも執筆時には自覚していることになる。当時の「私」は大学を卒業し、帰省した時の出来事を「中 両親と私」に記しながら先生宅を脳裏によぎらせているが、その際には、「しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控えてゐるのだとは固より気が付かなかつた」（中5）としている。しかしながら、そのように書き記す「私」とは、遺書を誦了し、様々に先生との交際を振り返る中で変貌を遂げているはずなのである。

従つて、「私」の視点は当時と執筆時の双方から複眼的に考究すべきだが、この問題の重要性は既に清水孝純によって以下のように指摘されている。

注目すべき点は、「私」が、一切が済み、ある時間を置いてこれを記したということであろう。「私」の叙述には、実はそうした二重の視覚が働いているといえるだろう。物語展開の時空では、一応現実とは当時の「私」の視覚によって眺められているが、それを眺めているもう一つの視覚がある。いうまでもなくそれは、先生の苦悩を受肉した視覚である<sup>2)</sup>。

しかし、清水の言う「ある時間」がどれくらいのものなのかは分からない。水谷昭夫が「作品『心』上の書き出し」「は、下五十六の小説的現在が終つた所、しかもまったく不特定の時の中から語りははじめられてい

る」<sup>3)</sup>と指摘するように、「私」は自らが書き始めている時間について、何らの言及もしていない<sup>4)</sup>からである。

遺書の終結から手記の書き出しに至るまでの時間経過に対して示唆を与えるのは、「私」が〈上〉〈中〉の中で自らの若さに言及している事実である。「私」の若さが過去形で表現された箇所を拾い出し、学生時代の「私」は若かつたと回想する「私」を浮かび上がらせるなら、「過去の回想に対するノスタルジー」（宋美景<sup>5)</sup>）を読み取ることもできる。つまり、執筆する「私」はもはや若くなく、死を選ぶ先生に匹敵する程の時間が経過しているという想定にまで発展するのである<sup>6)</sup>。執筆する「私」にとって学生時代が遠い過去へと化しているのであれば、先生との関わりに関する記憶は風化に曝され、解釈は変容を余儀なくされ、当時と執筆時における「私」の意識を区別する必要性が増すのである。一方、執筆時の「私」が自らを若いと見なしているなら、先生による遺書の執筆から程なくして手記は書かれたことになるが、そうであれば、「先生」の死や父の死を体験した現在の「私」が、学生時代の自分をまだ若かつたと感じるのは自然なことであり<sup>7)</sup>、先生と交際した当時の「私」を突き放して捉える意識を獲得し得たのだと見なすことができる。

松尾直昭は〈上〉〈中〉を執筆する「私」と作品内時間の「私」を全く別人として理解すべきだとして、その変化を発生させたのが先生から手渡された遺書であり、その遺書を解釈し、受け止めながら過ごした時間だとして次のように論じている。

作品の中で先生と共に居た時の「私」と『ころ』を語りつぐ「私」とは印象がかなり異なっている。彼の語り口は一種沈鬱な響きを持っている。当時、先生の後を慕つた若々しい「私」のその若さが、単に失なわれた結果とばかりは思えないのである。いささか結論じみて云えば、当時の「私」と現在の「私」とは全く別人物の感すらある。つまり何かによって「私」は当時の「私」とは別の人間になったのではないかということなのである。その変化の一点にあるものは、それこそが先生の「遺書」である。それに加えて遺書を懐に抱いて上京した時点、つまり先生の「遺書」の文章の最終部から、「先生と私」の冒頭に至るまでに流れた。所謂、書かれていない作品の時間での「私」の経験である。かつて、とまどいと驚愕の内に遺書に託された熱い血の流れを受け取り、彼固有の時間推移の中で、相貌を変えた事実は何を示すの

であろうか。それは次のように解釈されよう。つまり、先生が己れの心の凡てが血脈もゆかりもない他の人間に果たして伝わるのかと抱いたかすかな不安は、ここではすでに峻拒されているものであること。このことを物語っているのである。端的に云い切れば、「私」は変貌の内に先生の意志が受容されたことを証明しているのだ。そうした「私」が『こゝろ』を語り出すのである<sup>8)</sup>。

この考え方に立てば、「私」の筆致は遺書の影響を濃厚に受けていることになる。また、「私」は遺書を熟読しつつ先生との交際を振り返り、先生の書記行為に思いを馳せながらの手記執筆によって、その代替行為に参与していることにもなる。手記〈上〉〈中〉では先生の遺書を受け止めた「私」が先生の過去を知らない「私」を描きつつ、その随所に先生の過去を執筆時には熟知している様子を記載する。先生の遺書こそが執筆する「私」と執筆される「私」を分け隔てる最大の要素ならば、「私」による遺書読了と手記執筆の間に流れた時間の把握が切実な問題となってくる。従って、若さという時間概念を伴う語彙に関する書き手の意識を追跡することは、「今の時点からの回顧と当時に即した記述」<sup>9)</sup>における「私」の相違を理解する上で欠かせないのである。

### 3 〈若い〉の用例

『心』において、「若い」という用例は〈上〉に14例、〈中〉に1例、〈下〉に16例あり、全体で31例を数えることができる。また、それ以外に関連語句として「若かつた」を〈上〉に1例、「若過ぎた」を〈上〉に1例、〈下〉に1例発見できる<sup>10)</sup>。「若かつた」、「若過ぎた」も併せ、「若い」に関する全用例数を34として数えると、〈上〉で16例、〈中〉に1例、〈下〉に17例となるが、〈上〉〈中〉併せて17例が「私」による執筆であり、先生による〈下〉の17例と数の上でも一致を見せるのである。

「私」による用例(〈上〉〈中〉)を追うと、「私」が当時の〈若さ〉を執筆時に振り返った表現は「若い」私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた」(上3)、「私は若かつた」(上4)、「けれども凡ての人間に対して、「若い」血が斯う素直に働かうとは思はなかつた」(上4)、「若い」私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた」(上7)、「けれども年の若い」私の今迄経過して来た境遇からいつて、私は殆

んど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた」(上8)、「年輩の先生の事だから、艶めかしい回想などを若い」ものに聞かせるのはわざと慎んでゐるのだらうと思つた」(上12)、「年の若い」私は稍ともすると一図になり易かつた」(上14)、「始めのうちは珍らしいので、此隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与へたが、少し時日が経つに伴れて、「若い」私の気力は其位な刺戟で満足出来なくなつた」(上23)、「考へると是は私がまだ世間に出ない為でもあり、又實際其場に臨まない為でもあつたらうが、兎に角若い」私には何故か金の問題が遠くの方に見えた」(上29)の9例を数えることができる<sup>11)</sup>。これらの表現は〈上〉の前半部に多く現われており、「私」が当時の未熟さも見据えつつ<sup>12)</sup>、回想の視点にある様子を強くうかがわせるが、「彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた」(上1)という同世代の友人への言及も結果的には「私」による当時の自らの「若さ」への認識につながるし、「私はかなめの垣から若い」柔らかい葉を撿ぎ取つて芝笛を鳴らした」(上26)という「私」の若葉に対する言及さえもが、〈若さ〉へのこだわりを示しているように受け取れるのである。

当時の時間において、他者が「私」の若さに言及する様子を「私」が会話文として再現する場面もある。先生は「私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かずにゐられるが、「若い」あなたは左右は行かないのでせう」(上7)と同情的だが、「私」の父は「今の若い」ものは、金を使ふ道だけ心得てゐて、金を取る方は全く考へてゐないやうだね」(中8)と批判的に迫ってくる。先生による若さへの共感単に「私」だけに対するものではない。「若い」うち程淋しいものはありません」(上7)という見方に代表されるように若さ一般に対する洞察が根底にはあり<sup>13)</sup>、その感じ方が目の前に現われた「私」に向けて発せられたものなのである。しかし、これらの会話文も「私」が振り返つたものであることには変わりがなく、執筆する「私」は当時とは異なった視点を持ち得ていることがうかがえる。

その他には、「私」は先生を話題にした奥さんの「若い」時はあんな人ぢやなかつたんですよ。「若い」時は丸で違つてゐました」(上11)という話に「若い」時つて何時頃ですか」(上11)と尋ね返したやり取りが、やはり会話文として書き記されている。

一方、〈下〉の先生による用例を追うと、先生が当時の〈若さ〉を執筆時に振り返った表現には、先生が「私」の世代全体を指して言つた「其倫理上の考は、今の

「若い」と大分違つた所があるかも知れません」(下2)、「私」の若さに言及して記した「あなたの考へには何等の背景もなかつたし、あなたは自分の過去を有つには余りに「若過ぎた」のです」(下2)、当時への自己評価とも言うべき「然し年の「若い」私達には、この漠然とした言葉が尊く響いたのです」(下19)というような箇所もあるものの、圧倒的に御嬢さん、後に妻となった静に対するもので占められている。引越越しの際にまだ見ぬ静に対して興味を持った事実が「斯んな話をする、自然其裏に「若い」女の影があなたの頭を掠めて通るでせう」(下11)と回想されるのに始まって、恋愛感情に陥つた様子を説明すべく、「さうして「若い」女とたゞ差向ひで坐つてゐるのが不安なのだとはばかりは思へませんでした」(下13)、「私が宗教だけに用ひる此言葉を、「若い」女に応用するのを見て、貴方は変に思ふかも知れませんが、私は今でも固く信じてゐるのです」(下14)、「今と違つた空気の中に育てられた私共は、学生の身分として、あまり「若い」女などと一所に歩き廻る習慣を有つてゐなかつたものです」(下17)と続く。

しかしながら、先生は御嬢さんの〈若さ〉に未熟という否定的な意味合いを込めて、「若い」女に共通な点だと云へばそれ迄かも知れませんが、御嬢さんも下らない事に能く笑ひたがる女でした」(下26)<sup>14)</sup>、「若い」女として御嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、其「若い」女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです」(下34)と述べている。このような使われ方は奥さんの御嬢さんに対する眼差しが「然しまだ学校へ出てゐる位で年が「若い」から、此方では左程急がないのだと説明しました」(下18)と記されるのと同様である。

先生は御嬢さんの若さにこだわっている。先生に「求婚は人を介して親宛にするものだという旧来からの慣習が念頭にある」<sup>15)</sup>ことをよく示す「日本人、ことに日本の「若い」女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思つた通りを遠慮せずに口にする丈の勇氣に乏しいものと私は見込んでゐたのです」(下34)という表現を始め、「するとKのすぐ後に一人の「若い」女が立つてゐるのが見えました」(下33)、「其頃の私はまだ癩癩持でしたから、さう不真面目に「若い」女から取り扱はれると腹が立ちました」(下34)、「若い」美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しくさが、其為に破壊されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです」(下50)など、用法を広く確認できるからである。また、結婚後

のことではあるが、「男の心と女の心とは何うしても一つになれないものだらうか」(下54)と言つた静に先生が「私はたゞ「若い」時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました」(下54)と応答するのも彼女との関わりの中で生まれた表現である。

加えて、奥さんの先生に対する態度を執筆時の先生が回顧した「それからは私を自分の親戚に当る「若い」ものか何かを取扱ふやうに待遇するのです」(下15)、Kが御嬢さんの人間関係を気にした様子を記した「夫から「若い」男だらうか年輩の人だらうかと思案して見るのです」(下16)を挙げれば、遺書における若いという語の全用例となる。

先生は遺書の中で「私」を若いと言うことに始まって、その視線は御嬢さん、K、ひいては当時の自己へと広がっているが、こうして若さに関する用例を概観すると、遺書〈下〉を読んだ「私」が手記〈上〉〈中〉執筆の際に、やはり若さにこだわっている様子を確認できるのである。遺書を「下 先生と遺書」として後に引用する予定の「私」は若さに言及する先生の影響を受けているといつてもよく、だとすれば、「私」は未だ若い遺書に接した結果として若さを回顧するように執筆しているのか、それとも本当に若さを遠い過去のものとして位置付けるべき時間の中にあるのかという問題が生じてくるのである。

そこで、次節では「私」の若さに関する言及に着目しながら、その解釈が視点の置き方次第で変容する様子を示したい。先生と交際した当時と執筆時の「私」の間に横たわる意識の相違について議論しながら、手記の生成過程において、過去の記憶を蘇らせ、手繰り寄せ、記述し、読み返す中で、「私」の意識がいかに流転していたかを考えてみることにする。

#### 4 明滅可能な青年の〈若さ〉

##### 4-1 「傷ましい先生」を見据えた「若い血」

私は若かつた。けれども凡ての人間に対して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが「先生の亡くなつた今日」になつて、始めて解つて来た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々の素気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠けやうとする不快の表現ではなかつたのであ

る。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の価値のないものだから止せといふ警告を与へたのである。他の懐かしみに応じない先生は、他を軽蔑する前に、まづ自分を軽蔑してゐたものと見える。(上4)

「私は若かつた。けれども凡ての人間に対して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた」とは当時の認識である。当時は「若かつた」が、次文の末尾「思はなかつた」と「それが先生の亡くなった今日になつて、始めて解つて来た」を併せて考えると、この感じ方が当時におけるものであったことが分かる。「私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた」も「それが先生の亡くなった今日になつて、始めて解つて来た」と対比すれば、当時における感じ方であると言える。文末が「た」で終了する「若かつた」,「思はなかつた」,「解らなかつた」,「解つて来た」と、「る」で終了する「嫌つてゐたのではなかつたのである」,「不快の表現ではなかつたのである」,「警告を与へたのである」,「軽蔑してゐたものと見える」を分けて考えれば、執筆時の感情は両者の境界を成す「先生の亡くなった今日」以降で述べられていると解釈できる。「それが先生の亡くなった今日」の「それが」は解らなかつた当時の心況を指し示している。

ただ、「私は若かつた」と「けれども凡ての人間に対して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に対して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた」の間には意味の広がりには微妙な違いがある。「若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた」,「斯んな心持が起るのか解らなかつた」が当時の感じ方をそのまま言語化し、吐露した表現であることに比べると、「私は若かつた」はその一文のみに注目すれば、執筆時に当時の自己評価をしたという意味合いの混入を認めることもでき、読者が語り手の今に着目するような読みが生まれる余地もあるからである。

「それが先生の亡くなった今日になつて、始めて解つて来た」以降は、執筆時における意識である。「私は若かつた」との対応を重視するなら、「今日」は若くなく、先生の死から長い時間が経過していることになる。若かつた当時には分からず、今は分かるというのであるから、現在にあっては若さを客観視し得るのであり、成熟していることになる。「先生の亡くなった今日」とは、確かに先生と「私」の「出会いからはかなりの歳

月が経過している」<sup>10)</sup>かのような振り返られ方ではあるが、「先生の亡くなった今日」が先生の死の直後なら、忘却等による情報変容も少ないと考えられる。

「私を嫌つてゐたのではなかつた」,「不快の表現ではなかつた」,「警告を与へた」,「まづ自分を軽蔑してゐた」はいずれも執筆の時間における解釈である。分らなかつた状態から分かつた状態への変化が生じているならば、時間経過による成熟、分らなければ落ち着けないために生じる無理な合理化(ここには今書き記している解釈が間違っているかもしれないという不安も含まれる)、また、死という事実が生前の先生との比較を生じさせ、突如として答えを生んだという解釈も生じるであろう。

#### 4-2 「不思議」で「近づかなければ居られない」という「直覚」

私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何処かに強く働いた。斯ういふ感じを先生に対して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない。然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿気てゐると笑はれても、それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた。(上6)

語り手の視点は、「近づき難い不思議」,「何うしても近づかなければ居られないといふ感じ」,「斯ういふ感じ」では当時、「自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる」,「——是が先生であつた」では執筆時にある。文章の流れは、「然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから」の冒頭「然し」を境に分かれている。

文末に着目してみると、「思つてゐた」,「強く働いた」が過去形「た」で当時における認識であり、現在形「かも知れない」,「思つてゐる」が執筆時における判断である。「是が先生であつた」は「た」で終了するが、この箇所は当時の先生に対する評価の総括と言うべきであつて、その意味では執筆時の認識と見てよい。

冒頭の「最初から」には不思議で近づきたくなくなる感

じ方が先生との交際の全期間に及ぶ感情だったという意味が込められている。この感情は執筆時にますます強く「私」を染め上げる。執筆する「私」は先生の過去を遺書で知り、遺書の内容と当時抱いていた感情との間に接点を見出すべく自省を繰り返し、興奮が冷めた後に手記を執筆しているはずである。「然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられた」と比較すれば、「近づき難い不思議」、「何うしても近づかなければ居られないといふ感じ」と回想される当初の感じ方が正鵠を射ていたということになるのである。

当時の判断と執筆時の判断との結節点に位置するのが「斯ういふ感じを先生に対して有つてみたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない」という執筆の時間から振り返った時に生じる判断である。そのことは「頼もしく又嬉しく思つてゐる」が現在時制であることから判断できる。しかし、世間と没交渉で全く名前を知られていない利子生活者の先生を「私」が独占していた状況を含めれば、第三者に「近づき難い不思議」、「近づかなければ居られないといふ感じ」という先生の魅力は理解されていなかったはずであり、そのことには「私」も気づいていたと解釈できる。「斯ういふ感じを先生に対して有つてみたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない」とは当時既に自覚されていた感覚だが、先生死去に際する意識の復活時や執筆の時間にあつて強く「私」を揺り動かした感じ方である。「自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる」の「嬉しく」とは当時先生に近づき価値があると信じた自らの正当性が遺書に接し証明されたことに対してであり、「それを見越した」のは当時の行為と読める。

仮に、「斯ういふ感じを先生に対して有つてみたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない」を「私だけかも知れなかつた」「私だけだつたかも知れない」とすれば、当時特殊な感情を抱いていた事実は表現できても、その感情が「私」固有のものであるという自覚、つまり「私だけ」を十分に浮き上がらせはしない。「私だけ」は執筆時点の判断としては「私」の人を見る目の確かさを証明する根拠の言葉となり得るが、当時においては先生に寄りかかる「私」の幼稚さを暴く負の意味合いとして自覚されていたかもしれない。だとすれば、「何うしても近づかなければ居られないといふ感じ」は当時においては十分に言語化されず、感覚的なものに留まっていた方が「私」は不安を感じずに済んだのである。

「若々しいと云はれても」と「馬鹿気てみると笑はれても」は同格関係にあり、当時の「私」について、今のように周囲から(読者から)評価されても、という意味が含まれているが、視点の置き方次第で解釈の幅は広がる。当時の直覚に自信を深める執筆時の「私」の判断に対して、より成熟した立場の読者が「若々しい」と見なしたり、またそんなことで自らの正当性を示そうとするこだわりを「馬鹿気てゐる」と蔑むという見方もできるのである。

「私」による若さへの言及は当時の自己を執筆時に「私」が評価したものに他ならない。「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた」は「それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる」とひとまとめにして考えれば執筆時の認識になるが、文末は「た」で終結し、その点では「近づき難い不思議があるやうに思つてゐた」、「近づかなければ居られないといふ感じが、何処かに強く働いた」と併せて「私だけかも知れない」、「とにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる」を囲む形で文末「た」の枠組を形成している。文末に力点を置いてみると、「是が先生であつた」という認識は執筆時の「私」による理解であつたことが分かってくるし、「私」の「直覚」が強く浮き上がり、その感覚的鋭敏さが際立ってもくるのである。「然し其私丈には此直感が後になつて事実の上に証拠立てられたのだから」「それを見越した自分の直覚をとにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる」で肯定的に当時の判断を振り返るのは自信の再確認ということになる。

しかし、一方、文末が「た」の枠組「思つてゐた」、「働いた」、「先生であつた」を一組として見た時、「近づき難い不思議」や「何うしても近づかなければ居られないといふ感じ」が先生の様子を言語化できない状況であるのに対し、「人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人」では言語化し得ており、当時の意識として一括するには矛盾があるということもできる。つまり、文末に着目するのと、それぞれの文内における意味内容に着目するのでは違う解釈が成立するということなのである。

## 4-3 「温かい交際」と「同情の糸」

私は不思議に思った。然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。[今考へると]其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。若い私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。(上7)

この箇所は、文章全体から判断すると、「今考へると」以下が執筆時の解釈で、「私はたゞ其儘にして打過ぎた」までが先生と交際した当時における事実の記述であると言える。

しかし、「今考へると」以前を当時の感覚としてひとまとめにできはしても、細部に着目すると違った様相が浮かび上がる。当時の状況説明と断言できるのは「私はたゞ其儘にして打過ぎた」のみである。「私は不思議に思った。然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかつた」とは先生との交際の全期間に及んで継続した感情だが、一文毎に着目すると、文脈全体に注目するのでは受け止められる意味が異なってくる。「研究する気」が否定されているのなら、「私」が先生宅に出入りするのには情緒的動機に基づいてのもので、執筆時に振り返って一層強く自覚されるようになった感覚であり、前掲例(4-2)「私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居れないといふ感じが、何処かに強く働らいた」(上6)にも相通じる。

「今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた」には二度「私」が登場する。「其時の私」は執筆時の「私」によって振り返られた先生と交際時の「私」、私の生活のうちでの「私」は同じく執筆時に振り返られた「私」ではあるが、先生との交際時に限らず執筆時に至るまでの意識全てを総括しており、主観・客観すべての局面におい

て照らされた「私」である。「私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際が出来たのだと思ふ」は現在形の文末を取っており、その意味では執筆の時間の中にある。

「私は全くそのために」の「私」も〈上〉〈中〉を執筆する「私」を濃厚にうかがわせる表現だが、先生との交際が終結し、遺書読了後に絶え間なき内省と解釈を繰り返す「私」をも含んでいる。「もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら」の「私」についても、当時の「私」と見られるのは勿論だが、当時の「私」を執筆時に対象化したもう一人の「私」、執筆時間を生きる「私」とも解釈できるのである。

「私」が当時を指していることと断言できるのは、「其時の私の態度は」の「私」のみであり、その他は当時／執筆時の両可能性の中で読める。つまり、「若い私」でさえも当時／執筆時の両義性の下で読み得るのである。執筆する「私」によって回想された物語という側面に着目すれば「若い」のは過去であり、執筆する「私」は若さを客観視できる程度に成熟していると見ることができ。遺書を読むことで「私」は当時の若さに対する「自覚」を促されずにはいられなかったという訳である。

しかしながら、文章の流れに着目すると、「今考へると」から「先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである」に至るまでは執筆時における意識の中にある。「それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう」と「私は想像してもぞつとする」は、執筆時における当時の自己評価である。「先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである」は「今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものゝ一つであつた」以降をひとまとまりとして判断すれば、当時の「私」に映った先生が執筆時に回想されていることになる。

執筆時から当時が凝視される。しかし、〈上〉から収集できる先生の情報や先生の感じ方に関する「私」の発見を総括すると、先生との交際期間にあつて「私」が既に「先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである」というように感じていた可能性はある。十分に言語化されるまでに自覚されていたかどうかは定かではない。前掲例(4-2)「近づき難い不思議」、「何うしても近づかなければ居



られないといふ感じ」(上6)と併せれば、はっきりとは自覚されていなかったということになる。一方、研究されることを恐れていた事実を「私」が十分に自覚していたからこそ、「然し私は先生を研究する気で其宅へ出入りをするのではなかった」という形で明確な否定がなされていると見ることもできるのである。

#### 4-4 「美しい」奥さん

普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった。けれども年の若い私の 今 迄経過して来た境遇からいつて、私は殆んど交際らしい交際を女に結んだ事がなかった。それが原因か何うかは疑問だが、私の興味は往來で出合ふ知りもしない女に向つて多く働く丈であつた。先生の奥さんには其前玄関で会つた時、美しいといふ印象を受けた。それから会ふたびに同じ印象を受けない事はなかった。然しそれ以外に私は是と云つてとくに奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな気がした。

是は奥さんに特色がないと云ふよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈する方が正當かも知れない。然し私はいつでも先生に付属した一部分の様な心持で奥さんに対してゐた。奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたらしい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらへになつてゐた。それで始めて知り合になつた時の奥さんに就いては、たゞ美しいといふ外に何の感じも残つてゐない。(上8)

ここでの視点は当時と執筆時を往復している。文末に着目すると、「正當かも知れない」、「私を遇してゐたらしい」、「何の感じも残つてゐない」は現在形、他は過去形である。回想と呼ぶべきこの箇所において、文末が現在形の箇所は執筆時間における評価の混入とみなせる。しかし、これ以外がすべて当時の様子を事実そのままに伝えているとは考えにくい。

「普通の人間として私は女に対して冷淡ではなかった」から「私は是と云つてとくに奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな気がした」までには当時の事実や感じ方に関する回想が含まれている。「私は女に対して冷淡ではなかった」とは当時の状態を執筆時に振り返った表現である。「けれども年の若い私の今迄経過して来た境遇からいつて、私は殆んど交際らしい交

際を女に結んだ事がなかつた」も執筆時に当時を振り返った表現という見方が成立するが、「年の若い私」を執筆の時間における自己認識とすると、執筆している「私」は若い。「私」は執筆時も若い、先生との交際当時はもっと若かつたとして、「私」の若さに二段階を設定することもできる。「私」が若いならば、先生との交際の時間と遺書執筆の時間が接近し、先生死後程なくして遺書は執筆されたことになる。実際には若くない「私」が若いと称しているなら、〈上〉〈中〉の読者に自らが執筆時に下す判断には当時の感じ方から隔たつたものもあり、必ずしもふさわしいとは言い切れない場合もあることを釈明するために持ち出された表現とも見なし得る。その場合には、執筆する「私」より年上の読者、より成熟した読者が想定され、そのような存在と比較すれば自らは未熟者であるとして謙遜の体裁を取っていることにもなる。

「私の興味は往來で出合ふ知りもしない女に向つて多く働く」、「先生の奥さんには其前玄関で会つた時、美しいといふ印象を受けた」、「とくに奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな気がした」では、いずれも執筆時から当時の感じ方が振り返られている。「それから会ふたびに同じ印象を受けない事はなかつた」の「会ふたびに」も同様に先生と交際した当時の出来事になるが、「私」は先生死後、葬儀の場面を始めこの手記を執筆するまでに奥さん(静)と接触しているはずである。従つて、奥さんとその後深い交際があり、その過程で美しさへの認識がより強化されたという可能性も生じる。奥さんの美しさは初対面時に第一印象として記憶されたが、接触の機会が増すにつれて強く意識されるようになり、先生の死後、残された奥さんを見るに及んで決定的になつたとして、未亡人となつた奥さんに対する「私」の憐憫や恋愛感情の発生を想起する読解も構想され得るものとなる。奥さんとのその後の関係に思いを馳せると、「然しそれ以外に私は是と云つてとくに奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな気がした」の解釈を巡つて、当時は何も言うべきことはなかつたが、先生死後の今では奥さんともいろいろな付き合いがあり、その過程の中で奥さんの考え方や先生との結婚生活についてもそれまで知り得なかつた多くを知り、語るべき物語を豊富に持つに至つたとする論理も成立する。

しかし、「私」は先生に関しては遺書そのものに語らせるという態度にあるように見受けられる。というのも、〈上〉は先生の自殺や先生の死後には言及しない姿

勢で貫かれているからである。読者が〈下〉のその後を想像したくなるのは「とくに奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな気がした」の過去形文末に対して、では今はどうなのかとの疑問を發した時である。この疑問に対しては〈下〉のその後が書かれることによってしか解答を導き出せない。

「是は奥さんに特色がないと云ふよりも、特色を示す機会が来なかつたのだと解釈の方が正当かも知れない」という一文における「特色がない」という見方を否定し、「正当かも知れない」と解釈するのは執筆時の「私」であり、その一文中に埋め込まれた「特色を示す機会が来なかつた」とは当時の状況である。「然し私はいつでも先生に付属した一部分の様な心持で奥さんに対してみた」という表現では、先生と交際した当時の感じ方が執筆時に回想されている。「奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたらしい」とは先生宅に出入りしていた当時に加えて執筆時における「私」の奥さんに対する感じ方をも含んでいるであろう。推定の助動詞「らしい」は書き手の認識が不確かである様子を暗示する。「私」は奥さんの發する断片的な情報を紡ぎ合わせ、「夫の所へ来る書生だからといふ好意」で接してくれていたに違いないとの解釈に達する。執筆時の感じ方であれば、「私」の奥さんに対する認識は幾度も繰り返して呼び覚まされ、意識される度に新たな解釈可能性が検討されたことになる。その上で、残り続ける謎もまた強く呼び覚まされ、「らしい」というより他にないという感じ方が記録されている訳である。だが、これは飽くまで「私」による判断であり、奥さん本人がどう見ていたかは判断できない。読者は「私」の判断を信じてそれ以上の意味付けを行わないか、または「私」の判断を一面的過ぎるとして「私」とは異なる解釈をするという反応が予想されよう。

究極的な批判は、「私」が奥さんの自らに対する接し方を「好意」と解釈していることに対するものである。しかし、先生死後、奥さんと「私」の間に交際が継続したとすれば、奥さんは夫の自殺理由を突き詰めていくしかなく、夫と深い交際があり、しかも自由に口が利ける唯一の存在として「私」に近寄らざるを得ない。「好意」はより切迫した、止むにやまれぬ衝動へと変貌する。当時は「好意」であった、だがその後は必然へと化したとの含意をも「奥さんも自分の夫の所へ来る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたらしい」という表現の背後には想像できるのである。「だから中

間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつてゐた」も同様で、当時を執筆時に回想した見方と考える他に、当時の態度が継続しているとすれば、先生死後の今、奥さんとはもはや没交渉になるしかないという想像、先生という大切な存在を失った「私」と奥さんは亡き先生を巡って話題を共有でき、親密さを増したという見方、更には次第に先生という話題を離れた二人だけの私的交際が生じたという解釈なども生む。奥さんとの間に私的な関係が発生しているとみなせば、「それで始めて知り合ひになつた時の奥さんに就いては、たゞ美しいといふ外に何の感じも残つてゐない」という箇所からは、執筆時にあつては奥さんの外見上の美しさ以外にも様々な感情を持つに至っているという解釈が生じてくる。

#### 4-5 「偉く見えた」先生

年の若い私は稍ともすると一図になり易かつた。少なくとも先生の眼にはさう映つてゐたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とゞの詰りをいへば、教壇に立つて私を指導して呉れる偉い人々よりも只独りを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。(上14)

ここで「私」は執筆の時間から学生時代を振り返っているが、意味付けられるのは当時の感じ方や行動である。時の経過に伴い記憶も変容していくが、記述されたのは先生に密着した当時の行動を正当化しようとする論理である。止むを得なかつたという雰囲気が前面に押し出されてはいるが、執筆の時間に立つてみると、もっと別の振る舞い方があつたのではないかという可能性が「私」に閃いている様子をも暗示させる。その意味では先生との交際当時とは確実に一線を画する時間の経過が推察される。「少なくとも先生の眼にはさう映つてゐたらしい」からも当時の先生による自らへの評価を「私」が冷静に受け止められるようになっている状況が理解できるのである。

「私」が当時の意識を執筆時に回想している。しかし、回想する「私」は過去を語る約束を誠実に果たした結果として手渡された先生の遺書を讀了した「私」であり、先生への敬意は交際当時とは異なっているはずである。「先生の談話」、「先生の思想」、「只独りを守つて多くを語らない先生」についても、遺書の解釈や奥さ

んと先生の巡る会話なども含めると、膨大な考察が繰り広げられたはずであり、先生の過去に対する批判も生じていたかもしれない。だが、そのような思索によって、先生の威厳が失墜したということではない。先生も大学で「私」が接した教授や他の人々と同様の形で「私」が冷静に理解できるようになったということなのである。

## 5 青年の立脚点

『心』は大正3年4月20日より朝日新聞に連載発表され、完結<sup>17)</sup>直後の9月20日に岩波書店から刊行された<sup>18)</sup>。すると、「私」の大学卒業（明治45年7月）から2年後に作品は出版されていることになるが、「私」が23歳で順当に大学を卒業したならば、25歳で執筆しているという設定になる。けれども、2年に満たない期間は、黒木章の指摘にあるように「先生の問題を反芻させ先生の挫折と自殺とを回避或いは克服するための解答とか思想を確かなものとして採り当てさせるには実際の時間距離としては短か過ぎる<sup>19)</sup>」はずであるし、「私」の若さが前節で検討したように回想体で振り返られると、「私」が既に若さを喪失しているという自覚の中に生きているという判断を下したくなるのである<sup>20)</sup>。

明治天皇の死に端を発して大正元年に乃木希典・静子夫妻の殉死と先生の自殺があり、その後「私」が「上先生と私」、「中 両親と私」を執筆して、大正3年に作品『心』全編を公表したという考え方と「私」が先生の死後長い時間を経てから〈上〉〈中〉を執筆したという解釈は整合しない。しかし、このような相反する理解を許してしまう状況が作品には存在しているのである。

この問題に踏み込み、相反する解釈を止揚する論理を積極的に提案したのは藤井淑禎であった。藤井は「形式論理的にやっていると、辻褄の合わないところは、幾らでも出てくる<sup>21)</sup>とし、「私の卒業の年を明治四十五年と特定することによって回想中の時間がおのずと明治四十、四十一年から大正元年までに限定されてしまっていたわけだが、そうした明治四十五年という設定と私の回想のトーンとは両立不可能な関係にあるのではないか<sup>22)</sup>という前提に立つ。その上で、漱石の「原構想においてはおそらく、先生が十数年前の過去を血潮を浴びせるようにして私に打ち明けたのに匹敵するくらいの時間的距離が、現在の私と過去の私とのあい

だにも横たわっていた<sup>23)</sup>」はずで「振り返る今」は大正三年より後ろにはもってることができないとすれば、一連の事件そのものが大正三年より十年以上も前のこととして当初は構想されていた<sup>24)</sup>が、先生の「自殺が天皇の死を契機とするというプランは、あるいはこの明治四十五年設定とともに（順序は逆だろうが）中途から作者の脳裏に浮かんだ<sup>25)</sup>との解釈に論理的整合性を見出そうとする。確かに、「漱石は明治元年に満一歳で、明治四十五年には四十五歳、そして大正五年までしか生きなかった。文字通り「明治の兒」なのである<sup>26)</sup>」から、明治の終焉が強く心に刻み込まれており、その結果として作品の結末に顔を覗かせた可能性は否定できない。けれども、「主人公の私の語り口＝回想のトーンというのは、先生の死後、私がさまざまな艱難辛苦を経て、ちょうどかつての先生くらいの年齢になって学生時代を振り返っているかのようなトーンであるにもかかわらず、先生の死は作品が発表された大正三年のわずか二年前であり、もしも同時代読者に、小説における回想する時点というものは特に断りがない限りは執筆・発表時点と一致する、というような常識が共有されていたとしたら、彼らはその根源的な矛盾にどう決着をつけたのだろうか<sup>27)</sup>との疑問は確かに残るはずなのである。

〈上〉〈中〉の「私」が「若くない」なら、亡き先生を当時よりも冷静に捉え得ていよう。若い頃の「私」は「淋しさ」から先生にべったり寄り添うように振る舞っていたが、執筆時の「私」は遺書を書き記す先生が学生時代を回顧する様子にも似て、淋しさを消化できる成熟を獲得してはいまいか。「益繁く先生の玄関へ足を運んだ」（上6）「私」に「私は淋しい人間です」（上7）と言い、遺書の中では「死んだ気で生きて行かうと決心しました」（下54）とその心情を吐露して憚らない先生には過去の因果から生じた淋しさへの諦念を見ることができると、「私」はその感情を冷静に受け止めつつ、かつての先生との関わりを記述していることになる。熱に浮かされるようにして先生に近づく「私」に「恋に上る階段なんです。異性と抱き合ふ順序として、まづ同性の私の所へ動いて来たのです」（上13）と言い、「かつては其人の膝の前に跪ぎいたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥げたいと思ふのです」（上14）として距離を保とうとした先生を客観的に捉える視点に執筆する「私」は立っている。遺書を携え、手記を執筆する「私」と

は中年に達した先生が青春時代を遺書として回想したのと同じ行為を手記の執筆によって果たしていることになり、その意味では先生と同じ役割を果たすかのようにして読者の前に佇んでいるのである。静には過去を語らずに、それでも「私」には遺書として自らの過去を開陳する行為とは、「私」に対する先生の誠意が結晶した結果であると同時に静を侮辱する側面をも持つが、「私」が先生の遺書に自らの手記を添えて『心』として発表する営みもまた同様の意味を持つものである。先生は遺書を締めくくる際に書き記す。

私は私の過去を善悪ともに他の参考に供する積です。然し妻だけはたつた一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないので。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なので、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中に仕舞って置いて下さい

(下56)

先生の希望は遺書の公表を許可するにも関わらず、静には絶対に知らせるなどというものである。先生の生前を最も詳しく知る「私」に向かって静は夫の死因を尋ねるしかない状況に置かれるが、手記を紡ぎつつある「私」が〈上〉〈中〉脱稿後、先生の遺言通りに振舞うなら、静は『心』全編の読者にはなり得ない運命にあり、「私」もまた静に対して先生同様の裏切りを犯す結果となる。こうして、遺書を紡ぐ中年の先生と無気味な符合を見せながら、若さを喪失したかのような雰囲気醸し出した「私」が静には先生の過去に触れないよう仕向けていくことになるのである。西垣勤は女性が排除された物語として『心』を浮かび上がらせた<sup>28)</sup>。「私」が若さを喪失し、遺書執筆時の先生に匹敵する年齢に達しているならば、そこに遺書執筆時の先生との意識の重なりを見出し得るし、そのような一人称「私」は遺書でやがて読者の前に姿を現わすもう一人の一人称「私」、すなわち先生の在り様を予言する機能を担うとの解釈も成立するのである。

学生時代を振り返る「私」は、当時と執筆時を両極にして絶え間ない意識の往復運動を繰り返しつつも、体験を突き放し過去の情報として手記に封じ込める。自殺する先生を冷静に見つめる「私」を見据えるなら「私」は先生の後追いなどせずに生き続けると考えられようが、同時にかつての「私」を批評する姿勢の存在をも考慮すべきである。先生の過去を知りたいと

言って詰め寄った結果、先生は遺書を残して命を絶ってしまった。その事実を重視するならば、「私」は先生を自殺決行へ導いた誘導者とも見なし得る<sup>29)</sup>。〈上〉〈中〉にあって、「私」は先生がKを自殺に追い込んだ罪の意識に支配され、加害者となり果てた状況を痛烈に自覚していたような主観的表現は避けており、加害者としての痛恨を吐露する表現は見出せないが、先生に自殺を決行させてしまったという加害者意識を「私」の深層に想像する解釈<sup>30)</sup>は、遺書執筆時の先生と手記執筆時における「私」それぞれの意識をすり合わせる中で考慮すべきものとなるのである。

手記を執筆する「私」にとっての先生とは、もはや問い掛けが不可能な死者である点において、先生にとってのKのような存在であった。この状況は先生がK本人とやり取りできない中、その死者に激しく拘りながら生きていく様子に等しい。こうして〈若さ〉を回顧する視点にある「私」の姿勢は、遺書を執筆する先生の様子と驚く程の符合を見せるのである。

## 注

- 1) 北川淑恵「夏目漱石論——『こゝろ』の「上」「中」における語りの構造について——」(『樟蔭国文学』第37号 大阪樟蔭女子大学国語国文学会 2000年3月 53頁)
- 2) 清水孝純「『こゝろ』——「明治の精神」覚書——」(『文学論輯』第28号 九州大学教養部文学研究会 1982年3月/清水孝純『漱石 その反オイディプス的世界』翰林書房 1993年10月 191頁)
- 3) 水谷昭夫『漱石文芸の世界』(桜楓社 1974年2月 174頁)
- 4) 井上孝志『高等学校における文学の単元構想の研究——『こゝろ』(夏目漱石)の教材解釈と実践事例の検討を通して——』(溪水社 2002年2月 100頁)
- 5) 宋美景「『こゝろ』論——「私」の選択でわかるもの——」(『國學院大學大学院紀要——文学研究科——』第32輯 國學院大學大学院 2001年3月 168頁)
- 6) 大正3年4月、大学卒業(明治45年7月)後1年半を経た状態で〈上〉〈中〉が脱稿したという設定は考えにくく、執筆する「私」は若さを喪失し、成熟しているという考え方を取る論考として、越智治雄「こゝろ」(越智治雄『漱石私論』角川書店 1971年6月 248～302頁/玉井敬之・藤井淑禎編『漱石

作品論集成 第10巻 こゝろ 桜楓社 1991年4月75～103頁), 大澤吉博「対話から独白へ——複式夢幻能としての『こゝろ』」(平川祐弘・鶴田欣也編『漱石の『こゝろ』 どう読むか, どう読まれてきたか』新曜社 1992年11月 231～247頁), 小林美鈴「『こゝろ』——「語り」の構造をめぐって——」(『芸術至上主義文芸』第17号 芸術至上主義文芸学会 1991年11月), 助川徳是「『こゝろ』」(『国文学 解釈と鑑賞』第55巻第9号 至文堂 1990年9月), 藤井淑禎「天皇の死をめぐって『こゝろ』その他」(『国文学 解釈と鑑賞』第47巻第12号 至文堂 1982年11月), 結秀美「消滅する象形文字——『こゝろ』を読む」(『新潮』第1013号 新潮社 1989年6月 204頁), 中本友文「『こゝろ』の「私」/漱石の一人称小説の〈語り〉」(『高知大学学術研究報告』第38巻 人文科学 その1 高知大学 1989年12月), 竹腰幸夫「『こゝろ』——二つの自殺をめぐって——」(『中央大学国文』第16号 中央大学国文学会 1973年3月), 仲秀和「夏目漱石の研究——「漱石文庫」瞥見と, 『こゝろ』について——」(『私学研修』第139・140号 財団法人・私学研修福祉会 1995年12月), 蓮實重彦・小森陽一・石原千秋【『鼎談』『こゝろ』のかたち」(『漱石研究』第6号 翰林書房 1996年5月3～7頁/小森陽一・石原千秋編『漱石を語る2』翰林書房 1998年12月 160～164頁)における蓮實重彦の発言, 石原千秋「『こゝろ』 大人になれなかった先生」(みすず書房 2005年7月 146頁)などがある。

- 7) 水川隆夫『夏目漱石「こゝろ」を読みなおす』(平凡社 2005年8月 198頁)
- 8) 松尾直昭「作品『こゝろ』論(Ⅰ)——現象読解の試み——「私」の意味をめぐって」(『就実論叢』第14号其の一(人文篇) 就実女子大学・就実短期大学 1984年12月 93～94頁)
- 9) 藤井淑禎注釈『漱石文学全注釈 12 心』(若草書房 2000年4月 22頁)
- 10) 近代作家用語研究会・教育技術研究所編『作家用語索引 夏目漱石(第1期)第9巻 こゝろ』(教育社 1984年10月 505頁)により, 作品に登場する「若い」という語(全31例, <上>14例, <中>1例, <下>16例)を検索し, 列挙すれば以下ようになる(囲いによる強調は引用者による)。

「若い」私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを持つてゐはしまいかと疑つた」(上3), 「けれど

も凡ての人間に対して, 「若い」血が斯う素直に働かうとは思はなかつた」(上4), 「若い」私は全く自分の態度を自覚してゐなかつた」(上7), 「私は淋しくつても年を取つてゐるから, 動かずにゐられるが, 「若い」あなたは左右は行かないのでせう」(上7), 「若い」うち程淋しいものはありません」(上7), 「けれども年の若い」私の今迄経過して来た境遇からいつて, 私は殆んど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた」(上8), 「若い」時はあんな人ぢやなかつたんですよ」(上11), 「若い」時は丸で違つてゐました」(上11), 「若い」時つて何時頃ですか」(上11), 「年輩の先生の事だから, 艶めかしい回想などを若い」ものに聞かせるのはわざと謹んでゐるのだらうと思つた」(上12), 「年の若い」私は稍ともすると一図になり易かつた」(上14), 「始めのうちは珍らしいので, 此隠居じみた娯楽が私にも相当の興味を与へたが, 少し時日が経つに伴れて, 「若い」私の気力は其位な刺戟で満足出来なくなつた」(上23), 「私はかなめの垣から若い」柔らかな葉を撈ぎ取つて芝笛を鳴らした」(上26), 「考へると是は私がまだ世間に出ない為でもあり, 又實際其場に臨まない為でもあつたらうが, 兎に角若い」私には何故か金の問題が遠くの方に見えた」(上29), 「今の若い」ものは, 金を使ふ道だけ心得てゐて, 金を取る方は全く考へてゐないやうだね」(中8), 「其倫理上の考は, 今の若い」人と大分違つた所があるかも知れません」(下2), 「斯んな話をする, 自然其裏に若い」女の影があなたの頭を掠めて通るでせう」(下11), 「さうして若い」女とたゞ差向ひで坐つてゐるのが不安なのだとはばかりは思へませんでした」(下13), 「私が宗教だけに用ひる此言葉を, 「若い」女に應用するのを見て, 貴方は変に思ふかも知れませんが, 私は今でも固く信じてゐるので」(下14), 「それからは私を自分の親戚に当る若い」ものか何かを取扱ふやうに待遇するので」(下15), 「夫から若い」男だらうか年輩の人だらうかと思索して見るのです」(下16), 「今と違つた空気の中に育てられた私共は, 学生の身分として, あまり若い」女などと一所に歩き廻る習慣を有つてゐなかつたものです」(下17), 「然しまだ学校へ出てゐる位で年が若い」から, 此方では左程急がないのだと説明しました」(下18), 「然し年の

「若い私達には、この漠然とした言葉が尊く響いたのです」(下19)、「若い女に共通な点だと云へばそれ迄かも知れませんが、御嬢さんも下らない事に能く笑ひたがる女でした」(下26)、「するとKのすぐ後に一人の若い女が立つてゐるのが見えました」(下33)、「其頃の私はまだ癩癩持でしたから、さう不真面目に若い女から取り扱はれると腹が立ちました」(下34)、「若い女として御嬢さんは思慮に富んだ方でしたけれども、其若い女に共通な私の嫌な所も、あると思へば思へなくもなかつたのです」(下34)、「日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思つた通りを遠慮せずに口にする丈の勇氣に乏しいものと私は見込んでゐたのです」(下34)、「若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しくさが、其為に破壊されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです」(下50)、「私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました」(下54)

また、「若かつたは私は若かつた」(上4)として1例、「若過ぎたについては、「彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた」(上1)、「あなたの考へには何等の背景もなかつたし、あなたは自分の過去を有つには余りに若過ぎたのです」(下2)として〈上〉〈下〉に各1例を数えることができる。

- 11) 北川淑恵は、「私」に「若い」という修飾語が付いているものを挙げて、執筆時の「私」が「過去を振り返って、自分に客観的な判断を下せる立場にあるということがわかる。ここから、物語の時間から語りの時間に至るまでにある程度の歳月が経過しているという仮説が立てられる」(注1/55頁)としている。
- 12) 藤井淑禎注釈『漱石文学全注釈 12 心』は、「私は若々しいと云はれても」(上6)を挙げて、「現在の意味とは少し違って、「未熟だ」(落合直文『ことばの泉』大倉書店、明41)、「ばかばかしい」(『新編大言海』)のニュアンスに近い」(注9/23頁)としている。
- 13) 藤井淑禎注釈『漱石文学全注釈 12 心』は、「自我意識に目覚め、孤独を自覚するいっぽうで他者とのつながりをも求めてやまない青年期特有の心身のあり方に、心理学・生理学サイドから科学的メスが

入れられ始めたのもこの頃」(注9/28~29頁)としてこの見方は広く同時代の雰囲気であったとしている。

- 14) 藤井淑禎注釈『漱石文学全注釈 12 心』は、この箇所につき、「若い女性が笑い上戸であることは当時も広く知られていた」(注9/282頁)と解説している。
- 15) 注9) 311頁
- 16) 注9) 17頁
- 17) 連載は「東京朝日新聞」では8月11日、「大阪朝日新聞」では8月17日に完結する(『漱石全集 第9巻』岩波書店 1994年9月 363頁)。
- 18) 『新選 名著復刻全集 近代文学館 夏目漱石著 ころろ 岩波書店版』(名著復刻全集編集委員会編・ほるぶ発売 1984年3月〔第24刷〕)で複製に接することができる。
- 19) 黒木章「『手記』と『遺書』のあわい(一)——夏目漱石『ころろ』の構造と文体をめぐって——」(『聖学院大学論叢』第15巻第1号 聖学院大学 2002年10月 128頁)
- 20) 徳永光展「小説時間と年齢確定をめぐって——夏目漱石『心』読解への前提——」(『比較文化』第8巻 宮崎国際大学 2002年12月)
- 21) 玉井敬之・藤井淑禎・浅野洋「鼎談」(玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成 第10巻 ころろ』桜楓社 1991年4月 366頁)
- 22) 藤井淑禎「天皇の死をめぐって——『ころろ』その他——」(『国文学 解釈と鑑賞』第47巻第12号 至文堂 1982年11月/猪熊雄治編『夏目漱石『ころろ』作品論集 近代文学作品論集成③』クレス出版 2001年4月 114~115頁)。なお、藤井淑禎は玉井敬之・藤井淑禎・浅野洋「鼎談」(玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成 第10巻 ころろ』桜楓社 1991年4月 368頁)でも同様の見解を述べている。
- 23) 注22) 藤井淑禎「天皇の死をめぐって——『ころろ』その他——」(猪熊雄治編『夏目漱石『ころろ』作品論集 近代文学作品論集成③』クレス出版 2001年4月 116頁)
- 24) 藤井淑禎『小説の考古学へ——心理学・映画から見た小説技法史——』(名古屋大学出版会 2001年2月 10頁)
- 25) 注22) 「天皇の死をめぐって——『ころろ』その他——」に同じ
- 26) 飯島耕一「日本のベル・エポック 21——「行人」

- と「心」——」(『俳句』第37巻第9号 角川書店 1988年9月 125～126頁)
- 27) 注24) 1～2頁
- 28) 西垣勤「『こゝろ』覚え書」(『日本文学』第20巻第9号 日本文学協会 1971年9月/西垣勤『漱石と白樺派』有精堂 1990年6月/玉井敬之・藤井淑禎編『漱石作品論集成 第10巻 こゝろ』桜楓社 1991年4月), 西垣勤「作品の読み方について」(『近代文学研究』第10号 日本文学協会近代部会 1993年4月/西垣勤『近代文学の風景——有島・漱石・啄木など——』績文堂 2004年5月)
- 29) 藤井淑禎「紅ヶ谷の青い空——『行人』から『心』へ——」(『湘南文学』第6号 学校法人神奈川歯科大学・湘南短期大学 1994年4月 34頁)は「『心』は、先生が私と出会うことによってその安息を奪われていく物語であった。」と規定している。
- 30) 渥見秀夫「幻の二人称——『こゝろ』における再読の要請——」(『愛媛大学教育学部紀要』第51巻第1号 愛媛大学教育学部 2004年10月 183頁)は「先生は私によって「殺される」途を選ぶ。彼がためらい続けていた自殺の決行へ踏み出すことができたのは、罪のない私が発した一通の電報の「不自然な暴力の御蔭」であった。」と解釈している。

#### 付記

本文の引用は、『漱石全集 第9巻』(岩波書店 1994年9月)によるが、ルビは省略した。各引用の末尾に付した章番号は初刊本『心』(岩波書店 1914年9月)の三部構成による。なお、説明の必要上、囲み等の強調を適宜施した。